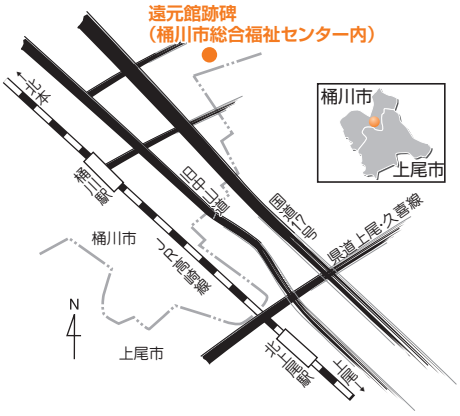
上尾歴史散歩 284

遺跡が語る上尾の歴史

中世の上尾
～足立遠元（とおもと）とその一族～

写真２　伝足立右馬允遠元館跡碑（桶川市）



約800年前、鎌倉時代の上尾は足立氏一族が支配していた。足立氏の祖・遠元は平治の乱（1159年）で源義朝に従軍し功績を挙げ、馬術に優れた武士であると『平治物語』に書かれている。

『吾妻鏡（あづまかがみ）』（**写真１**）によると、治承（じしょう）四（1180）年10月２日、伊豆国で挙兵した源頼朝を武蔵国隅田渡しで迎えた遠元は、同８日、頼朝より足立郡郷（旧吹上町から東京都足立区辺り）の所領職を安堵（保証）された。参陣後、６日目のことである。

頼朝が挙兵以前、後白河院の近臣である藤原光能（みつよし）らは、当時全盛であった平氏打倒を密かに企てた。光能は遠元の娘と結婚して姻戚（いんせき）関係を結び、平清盛打倒の院宣（上皇や法皇の命令を受けて出す文章）を作成して、遠元を介して頼朝の挙兵を促した。遠元は光能から得た反平氏勢力の情報を頼朝へ提供し、頼朝挙兵の影の功労者となったのである。これが、わずか６日後に所領職が安堵された理由であったとみられている。

遠元は、頼朝が鎌倉に幕府を開くと公文所の寄人（よりうど）（職員）に任命された。このことからも、文武両道の武士像をうかがい知ることができる。文治五（1189）年７月、奥州藤原氏征伐に従軍した遠元一族は、故郷上尾を通過する鎌倉街道中つ道を意気揚々と行軍したであろう。建久元（1190）年正月、頼朝に随行して京都御所に参内した遠元は、武士の最高位・左衛門尉に任官された。承元元（1207）年頃、70歳を越えて死去したと考えられている。

なお遠元の居館である足立氏館の所在地は、桶川市末広や、さいたま市植田谷本村と諸説がある。桶川市の館跡があったと推定される場所には、現在石碑が建てられている（**写真２**）。遠元は足立郡内に元春（もとはる）、元重（もとしげ）、遠継（とおつぐ）、遠村（とおむら）、遠景（とおかげ）の５人の子息を配置し、子孫が代々その地を支配した。嫡子（家督を継ぐ子）元春は遠元の足立氏館に居住した。その他、元重は草加市と足立区の境である淵江郷を開発して淵江氏を、遠継は川口市平柳を開発して平柳氏を、遠村は桶川市川田谷を開発して河田谷氏を、遠景は市内畔吉地域を開発して畔吉氏を名乗った。畔吉氏館は、小敷谷大石南中学校の西通Ⅰ遺跡や、畔吉の殿山城跡と考えられるが明確ではない。畔吉遠景の子・遠連は、京都御所を守る滝口武士となった。その後、遠元の子孫は丹波国（兵庫県）へと移住し、戦国時代まで活躍することとなった。

（上尾市文化財保護審議会委員　加藤功）

写真１　『吾妻鏡』

コラム column　足立郡から消えた足立氏はどこへ

遠元の死後、弘安８（1285）年の霜月騒動で安達・足立氏一族が討たれると、足立郡郷職は北条氏が継承するが、黄梅院文書によると、応永４（1397）年に淵江郷・植竹郷・河田郷の所領を、足立大炊助が有していたことが分かっている。しかしその後、足立郡から足立氏一族の消息は途絶えてしまう。

兵庫県丹波市青垣町には「丹波足立氏系図」（**写真１**）が伝来する。遠元の孫である遠政は、承元３（1209）年に丹波国佐治荘（旧青垣町）を与えられ地頭として西遷し、山垣（萬歳山）に城を築いて本拠地とする。丹波足立氏は、鎌倉、南北朝、室町、戦国時代の厳しい約350年間を武家として生き抜くが、天正７（1579）年、秀吉の弟・羽柴秀長により萬歳山は落城し、ついに足立氏一族は帰農した。

加古川の清流に育まれ、丹波あまごの里として有名な丹波市青垣町には、全人口のうち約４割の3,300人が足立氏を祖先に持ち、足立氏姓を名乗って、足立氏の歴史と文化を守っている。

写真１　丹波足立氏系図